

各 農 業 改 良 普 及 セ ン タ ー 所 長 様
各 農 業 協 同 組 合 長 (営 農 担 当 者) 様
各 病 害 虫 調 査 協 力 員 様
各 農 業 関 係 機 関 長 ・ 団 体 長 様

京 都 府 病 害 虫 防 除 所 長
(公 印 省 略)

病 害 虫 発 生 予 察 情 報 に つ い て

下 記 の と お り 発 表 し ま し た の で 送 付 し ま す 。

病 害 虫 発 生 予 報 第 9 号 (1 1 月)

予 報 の 概 要

作 物 名	病 害 虫 名	予 想 発 生 量 < 平 年 比 (前 年 比) >
チ ャ	カンザワハダニ チャノホソガ	並 ~ <u>やや多</u> <u>多</u>
野 菜	べと病 (アブラナ科野菜)	並 (少)
	白さび病 (アブラナ科野菜)	並 (多)
	白斑病 (アブラナ科野菜)	並 (並)
	菌核病 (キャベツ)	並 (やや少)
	黒腐病 (キャベツ)	並 (並)
	コナガ (アブラナ科野菜)	並 (並)
	ネギアザミウマ (ネギ) ネギハモグリバエ	並 (多) やや <u>多</u> (やや少)

平 年 と は 過 去 1 0 年 の 平 均 で あ る 。

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

3 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

近畿地方 1 か月予報

(1 0 月 2 0 日 から 1 1 月 1 9 日 までの天候見通し)

平成 1 9 年 1 0 月 1 9 日
大阪管区气象台 発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、1 週目は晴れる日が多く、その後は周期的に変わるとでしょう。

向こう 1 か月の気温は、高い確率 5 0 % です。

週別の気温は、1 週目と 2 週目が高い確率 5 0 %、3 ~ 4 週目が平年並または高い確率ともに 4 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

		低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温		2 0	3 0	5 0
降 水 量	近畿地方	3 0	3 0	4 0
日 照 時 間		3 0	4 0	3 0

注意

大阪管区气象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病虫害発生予察の一つの根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病虫害防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温は高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成 1 8 年 5 月 29 日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままでも残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準 (人の健康を損なうおそれのない量 ; 0.01ppm) が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品 (農産物等) の流通が禁止となりました。

このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散 (ドリフト) しないように十分注意してください。

予報本文

チャ

1 カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並～やや多い

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 11月の気温は高く(+)、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。

(2) 翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。越冬前の防除が十分でないと、翌春の一番茶期間近に発生が多くなり、防除に苦慮する場合があるので、越冬前防除の徹底を心掛け、遅くとも11月末までに終えるようにする。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：平年比多い

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生量は山城で平年比多く(+)、丹波で平年比やや多い(+)

(2) 10月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比多く(+)、綾部市で平年比少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 通常、年5回世代を繰り返し、蛹で越冬する。

(2) 特に自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し越冬密度を下げるようにする。

3 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めてチャへの寄生が確認され、分布の拡大が懸念されている。巡回調査では山城地域で発生が認められ、多発ほ場も確認されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 年4回発生する。

(2) 成虫発生前の秋整枝やすそ刈りによって幼虫の寄生葉を除去し密度を抑制する。

(3) 農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

なお、成虫発生期の散布は密度抑制効果がほとんど期待できない。

(4) 幼虫は、うねのすそ部や葉層内部の古葉の裏面に寄生するので、薬剤散布を丁寧に行う。

野菜

1 ベと病(アブラナ科野菜)

予報内容 発生量：平年並(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 1 0 月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 1 1 月の気温は高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 肥切れは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
- (2) 結球開始期以降、気温が低く曇雨天が続くと発生しやすい。

2 白さび病（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 1 0 月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 1 1 月の気温は高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 適温は10 前後で降雨が続くと発生しやすい。
- (2) 窒素肥料過多をさける。

3 白斑病（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 1 0 月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 1 1 月の気温は高く（ - ）、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 肥切れは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
- (2) 気温が低く曇雨天が続くと発生しやすい。

4 菌核病（キャベツ）

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 春期は、発生を認めなかった（ - ）。
- (2) 1 0 月中旬の巡回調査では、発生を認めていない（平年並）。
- (3) 普及センター、病害虫調査協力員等からの報告では、9月中旬に丹後地域で発生が認められている。
- (4) 1 1 月の気温は高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 適温は20 前後、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生き残る。

5 黒腐病（キャベツ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 1 0 月中旬の巡回調査では、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 普及センター、病害虫調査協力員等からの報告では、八ボタンで発生が認められている。
- (3) 1 1 月の気温は高く、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発病を助長する。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。

6 コナガ（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）10月中旬現在、発生量は平年並。
- （２）10月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は亀岡市で平年比やや少なく（-）、京丹後市で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- （２）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

7 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- （１）10月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。
- （２）11月の気温は高く（+）、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- （２）葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

8 ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）10月中旬現在、発生量は平年並であった。
- （２）11月の気温は高く（+）、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

9 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気である。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認された。

最近では、平成19年10月に、発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

発生生態及び防除上注意すべき事項

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。そのためには、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

防除対策の基本事項

- ・施設内にウイルス・コナジラミを「入れない」。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

- （１）タバココナジラミ類を介して伝染するので、発生状況に注意する。
- （２）苗を購入する時は、コナジラミ類が寄生していないか、先端部の葉が黄色くなって表側が巻いていないかを確認し、健全な苗を植え付ける。
- （３）発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。
- （４）野良ばえトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。
- （５）開口部（サイド、出入口、天窓等）すべてを0.4mm目合いの防虫ネットで被覆する。出入口は2重に被覆する。

- (6) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (7) 近紫外線カットフィルムを使用する。
- (8) コナジラミ類に対する発生初期の防除を徹底する。薬剤で防除する場合は、葉裏までていねいに散布する。
- (9) 同一系統の薬剤の連用は薬剤感受性の低下につながるため、ローテーション防除を実施する。
- (10) 天敵や微生物農薬を有効利用する。
- (11) ラノーテープを使用する場合は、定植直後から使用する。
- (12) 黄色粘着板を吊り下げて、コナジラミ類の発生を把握する。

10 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。国内では在来系統（バイオタイプ J p L）、バイオタイプ B（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプ Q が確認されている。

農業総合研究所と病害虫防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生していることが判った。平成17年にはバイオタイプ Q が府内で初めて確認され、平成18年には綾部市まで発生地域が拡大した。

タバココナジラミ類は、夏以降発生が増加し、また、薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、総合的な防除対策（トマト黄化葉巻病参照のこと）が必要である。

11 ホウレンソウ ベと病

昨年秋から今年の春にかけて、レース1～5の抵抗性しか持たない品種を侵す、べと病が府内各地で蔓延した。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ベと病の病原菌は藻菌類に属するカビの一種で、現在は7つの系統（レース）が確認されている。昨年秋から今年の春にかけて京都府内で発生した「べと病」について、レース検定の結果、レース5以下の抵抗性しか持たない品種を侵す新しいレースであることが確認された。
- (2) ベと病は平均気温が8～18℃、とくに10℃前後で、曇天や降雨が続くと多発する。また、早播きや厚播き、施肥量の多い時などは葉が繁茂し軟弱に育つので、被害が大きくなる。
- (3) 今後、は種する場合は、レース6以上の抵抗性を持つ品種を選定する。
- (4) 発病株は伝染源となるので、早期に見つけ、除去処分することが重要で、収穫後は、残さをほ場周辺には放置せず、集めて土中に埋め込むか袋に入れて処分する。
- (5) 多湿条件は発生を助長するので、温度、かん水、ハウスの換気などに留意し軟弱にならないように栽培管理をする。
- (6) トンネル栽培やベタ掛け栽培している場合は、発生に気付くのが遅れることがあるので、こまめに見て回り、初発生を見逃さないようにする。
- (7) 発生を認めたら、収穫までの日数に余裕がある場合は、農薬等で防除を行う。

病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コナ」をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075 - 315 - 2906
・山城北	農業改良普及センター	0774 - 62 - 8686
・山城南	農業改良普及センター	0774 - 72 - 0237
・南丹	農業改良普及センター	0771 - 62 - 0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773 - 42 - 2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773 - 22 - 4901
・丹後	農業改良普及センター	0772 - 62 - 4308

農作物病虫害情報サービス

- ・テレホンサービス
0771 - 23 - 6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621 - 0806 京都府亀岡市余部町和久成 9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539